子どもたちの声が届いた！

子どもたちにふさわしい世界を築こう！

子どもフォーラムの参加者たち
©UNICEF/HQ02-0074/Susan Markisz

「国連子ども特別総会」に世界の子どもたちが参加

2002年5月8日から10日まで、アメリカ合衆国のニューヨークで、「国連子ども特別総会」がひらかれました。この会議は、今後およそ10年の間に子どもたちのために世界が何をするのかを約束する大切な会議で、ユニセフもその成功に向けて長い間とりくんできました。

会議には、60カ国以上の首脳、およそ180カ国の政府の高官、250人以上の各国の国会議員、そして政治以外の分野から合計6000人もの参加者が集まりました。1989年に「子どものための世界サミット」がひらかれてから、世界の子どもたちの状況はどれだけよくなったのか、それとも悪くなったのか、これから何をしなければならないのか、真剣な話し合いが続きました。

この会議が子どもたちにとって大切だった理由がもうひとつあります。それは、子どもたちが初めて国連総会に正式に参加したことです。世界153カ国から集まった404人（女子241人、男子163人）の子どもたちは、本会議直前の5月5日～7日にひらかれた「子どもフォーラム」に参加しました。司会も子ども、出席者も子ども、最初のゲストスピーカーを除いてまったくおとなのいない、3日間の子どもたちだけの会議でした。そして、「国連子ども特別総会」の開会式で、子どもの代表2人がスピーチをおこない、「国連子ども特別総会」が最終日に会議の結論とした文書「子どもにふさわしい世界」の内容にも大きな影響を与えました。

子どもたちは、この大切な国際会議で、どのように活躍したのでしょう。元ユニセフ子どもネットワーカーで、「国連子ども特別総会」に政府子ども代表のひとりとして参加した田中郁江さんに報告してもらいました。田中さんは、昨年12月に横浜でひらかれた「第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」にも参加し、そのときの体験をこの会議で発表しました。

国連子ども特別総会開会式
©UNICEF/02-0144/Susan Markisz

子どもフォーラム開会式で自作の“世界が必要としていること”という歌をひろうした10歳のシャウン・トンプソンくん。
©UNICEF/HQ02-0067/Susan Markisz

田中郁江さんからの「子どもフォーラム」報告

子どもフォーラムに参加する田中郁江さん（左）©日本ユニセフ協会

子どもフォーラム 1日目

初日は開会式の後、8つの地域グループごとに集まって子どもフォーラムの目標や話し合いたいテーマを決めました。日本は東南アジアのグループに入り、話し合いのルールは「だまって人の話を聞く」、そして目標は「楽しくやろう！」ということに決まりました。話し合いたいテーマには、教育、商業的性的搾取、健康問題の順に多く意見があげられました。

午後には「国連子ども特別総会」とは何か、この総会が最後にとりあげようとしていた文書“A World Fit for Children（子どもにふさわしい世界）”の案にどんなことが書かれているか、などの説明があり、この総会がひらかれる理由やこの10年間の子どもの状況、会議で何がおこなわれるのかを聞きました。メディアによる取材についての注意などがあった後、最後に子ども参加者全員で写真を撮り、1日目は終わりました。

©UNICEF/HQ02-0077/Susan Markisz

2日目

2日目は、次の4つの「委員会」を決めることからはじまりました。「委員会」には各地域グループからひとりずつの委員を出します。｜メディア担当（取材に応じる）、｜閉会セレモニー担当、｜話し合いの評価担当、｜話し合いの内容をまとめる担当。

その後は、｜教育、｜子どもの兵士、｜参加と協力、｜搾取と暴力と虐待、｜HIV/エイズ、｜貧困、｜環境、｜健康、の8つのテーマグループに自由に分かれ、話し合いをおこないました。私は｜搾取と暴力と虐待グループに参加し、日本には子どもの商業的性的搾取を目的にアジアに出かける男性がいるということを発表しました。私のグループにはアフリカやインドなどの子どもたちが多く集まり、子どもの労働やストリートチルドレンについて多く話されました。ユーゴスラビアから来ていた子が、テレビで放送されているセックスや暴力のシーンのことを問題にしていたことが印象に残っています。

話し合いの後、全員で集まり、話し合われた内容を発表しました。教育についての発表では、「もっと学校をたてるべきだ」「先生の数を増やさないと」などの意見が多く、それを聞いて日本の教育の問題点、たとえば「子どもの基本的な権利について知らない」などとはすこし次元がちがうな、と感じました。

子ども記者からの質問に答えるキャロル・ベラミーユニセフ事務局長。子どもたちは会期中各界のリーダーたちと積極的に話しました。

©UNICEF/02-089/Susan Markisz

3日目

最終日は、本会議中のサイドイベントの参加者を決めました。本会議場でおこなわれる各国からの発表やパネルのほかに、会場となっていた国連ビルのさまざまなところで、関連のサイドイベントがおこなわれる予定だったのです。

私は昨年12月にひらかれた「第2回 子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議（横浜会議）」のフォローアップイベント“Beyond Yokohama（横浜をこえて）”に参加することになりました。このイベントは9日の午後ひらかれ、横浜会議のビデオ上映後、10分間の子ども代表によるプレゼンテーションの時間に、私と、もうひとりの日本からの政府子ども代表だった澤野佳子さんとアフリカから来ていた男の子とで、ひとつのスピーチを発表しました。スピーチの内容は、私と澤野さんの強い希望で、横浜会議で発表された子ども・若者代表によるファイナルアピールを盛り込むというかたちになりました。ファイナルアピールのポイントの中からいくつかを補足説明しながら、子どもたちが何をアピールしたかを伝えました。横浜会議の子ども・若者代表によるファイナルアピールは、最終的に国連文書となり、各国に正式な記録文書として配られました。それも成果のひとつになったと思います。

「子どもフォーラム」最終日の閉会式はすごい盛り上がりでした。希望者をつのり、1カ国1～2分ほどの出し物が次から次へとおこなわれました。民族衣装を着て踊ったり、歌ったりする子どもが多く、日本の子どもたちは、はっぴやゆかたを着て三本締めで会場を盛り上げました。

子どもフォーラムの最終日。それぞれの民族衣装などを身につけた参加者達が、風船をとばしました。
©UNICEF/HQ02-0119/Susan Markisz

国連子ども特別総会での子どもたち

United Nations Special Session on Childlen

トピックス Topics

「わたしたちにふさわしい世界」

©UNICEF/02-0148/Susan Markisz

「国連子ども特別総会」の初日、子どもたちによるスピーチを発表したのは、ボリビアから来た13歳のガブリエラ・アリエッタさんとモナコから来た17歳オードリー・シェイヌさんです。さまざまなところで権利を守られずにくらしている子どもたちの代理として、ふたりは力強いメッセージを世界に伝えました。

スピーチ　「わたしたちにふさわしい世界」（一部抜すい）

「わたしたちは世界の子ども。わたしたちは、搾取や虐待の犠牲になっている子ども。わたしたちはストリートチルドレン。わたしたちは戦争の子ども…。わたしたちは、これまで声を聞かれることのなかった子どもです」

「わたしたちにふさわしい世界がほしいのです。子どもにふさわしい世界は、すべての人にふさわしい世界でもあります」

「わたしたちにふさわしい世界では…

- **子どもの権利が大事にされます**
- **搾取も虐待も暴力もありません**
- **戦争もありません**
- **必要な医療が受けられます**
- **HIV/エイズがなくなります**
- **環境が守られています**
- **貧困の悪循環はありません**
- **教育が受けられます**
- **子どもたちが積極的に参加することができます」**

「わたしたちは約束します。おとなになったときにも、子どもである今と同じ情熱をもって、子どもたちの権利を守ることを」

「わたしたちは世界の子ども、生まれや育ちは違っても、共通の現実を分かち合うのです。 あなたがたは子どもを未来と呼びます。けれどもわたしたちは、今を生きる存在でもあるのです」

元子どもの兵士の証言

©UNICEF/02-0113/Susan Markisz

「14歳のとき、軍隊に入りました。家族はひとりのこらず殺されてしまい、復しゅうしようと思っていたのです」

「国連子ども特別総会」の前日に、国連安全保障理事会でひらかれた「紛争下の子ども」についての会合に、戦争で被害を受けた3人の子どもと若者が参加し、自分たちの過酷な体験を話しました。イズマエルは3年間シエラレオネの内戦を戦いました。「他の人を思いやるような人間的な気持ちはだんだん消え、銃を持っていることが心地よくなっていきました」イズマエルは当時のことをそうふりかえります。その後、リハビリテーション・センターで学校に通うようになってはじめて、自分のしたことに対する罪の深さと恥ずかしさを感じるようになったといいます。ようやく社会復帰したイズマエルは、現在アメリカで勉強しています。

この会合で、アナン国連事務総長は、「あまりにも長い間、子どもたちが兵士として使われてきたことが悔やまれます」と話し、国連が子どもの兵士をなくすためのあらたな対策をすすめると発表しました。

9400万人の「SAY YES!」

国連本部で「Say Yes」の誓いをするアナン国連事務総長と子どもたち

©UNICEF/HQ01-0155/Nicole Toutounji

5月7日、「子どもフォーラム」の最終日には、この総会に向けて全世界でとりくまれていたセイ・イエス・フォー・チルドレン・キャンペーンで集まった署名の数が発表されました。その数は、194か国から合計9400万以上。これだけの人びとが、子どもたちへの思いを署名というかたちで明らかにし、子どものために行動を起こすよう声をあげたのです。世界のおよそ60人にひとりはこの署名に参加したことになります。

署名の数は、ネルソン・マンデラ氏とグラサ・マシェル氏に報告され、世界中の人びとの声は、集まった全世界の各界のリーダーに大きな影響を与えました。ユニセフ子どもネットワーカーが集めた署名の数は8,804でした。

マンハッタンは子どもでいっぱいに

©UNICEF/Stacy Sullivan

5月8日には、ニューヨークのマンハッタンは、「子どもの権利を守ろう」という子どもたちのパレードでうめつくされました。100カ国以上の子どもたちが、自分の国の国旗や、「世界的な教育キャンペーンを」と書かれたオレンジ色の風船、「子どもの兵士をなくそう」というプラカードを持ったり、「子どもの労働をなくそう」と書かれたTシャツを着たりして行進しました。行進しながら、「わたしたちは何がほしい？」「子どもの権利！」というメッセージを大声でうったえました。沿道では、おとなたちが拍手を送り、商店やレストランから出てきた人が子どもたちを応援しました。

★郁江ちゃんの感想★

子どもフォーラムと子ども特別総会に参加して

率直な感想として、「子どもフォーラム」は、問題はあったけれど、子ども参加をはじめておこなった国連総会にしては、成功したといえるのではないかと思います。なにしろ子どもが400人以上もいたので、収拾がつかず、何がおこなわれているのかよく把握できなかったり、通訳の問題などから時間がむだにかかってしまったり、ということが多かったです。しかし、それは何より「子ども参加」を常に念頭においていたからだと思います。決めごとがスムーズにいかず、時間がオーバーしていてもファシリテーター（司会者）は口を出さず、だまって見まもっていました。話し合いのときも、内容を重視するより、全員がかならず発言することに気を配っていました。それでも英語ができる人が多少有利であったことは事実ですが、横浜会議のような大きな混乱はなく終わったことに心からホッとした、というのが正直なところです。

だから、よく言えば「子ども参加」を本当に考えたフォーラムでしたが、悪く言えば内容の薄い話し合いだったと思います。しかし、世界中の400人の子どもが集まって内容の濃い話し合いをするのは本当にむずかしいと思うし、同じ想いを持った子どもたちが世界中から400人も集まってきたという事実だけでもすばらしいことだなと実感しました。横浜会議のファイナルアピールの時の感動がよみがえり、あの時のような一体感をまた実感できました。

「国連子ども特別総会」で約束されたこと

子どもの問題に対するとりくみとして、1990年代は「教育」や「健康」が中心となっていましたが、今回これに加えて「虐待・搾取・暴力」や「HIV/エイズ」があらたな課題とされました。また、思春期の子ども（およそ12～17歳）へのとりくみや、子ども参加がより大切にされました。

総会で約束された主なこと

保健について

- ○ 赤ちゃんや5歳になる前の子どもが命を失う割合を、2010年までに少なくとも3分の1へらし、2015年までには、3分の2へらす
- ○ 赤ちゃんを妊娠したり出産したりするお母さんが命を失う割合を、2010年までに少なくとも3分の1へらすとともに、2015年までには4分の3へらす
- ○ 2015年までにすべての子どもたちが基礎的な保健サービスを受けられるようにする

教育について

- ○ 2010年までに、学校に行くはずの年齢なのに学校に行っていない子どもの数を半分にへらし、10人のうち9人の子どもは小学校やその代わりになる場所に通えるようにする
- ○ 2015年までに小学校や中学校における男女の不平等をなくす
- ○ 2010年までに読み書きや計算のできるおとなの割合を50％増やす

HIV/エイズについて

- ○ 最も深刻な影響を受けている国は2005年、世界全体では2010年までに、15～24歳のHIVの感染率を50％へらす、という目標を実現するために、達成期限を定めた国内目標を2003年までにつくる。
- ○ HIVに感染している赤ちゃんや幼い子どもの割合を、2005年までに20％、2010年までに50％へらす